

命^{ぬち}ぬバトン

那覇市立城岳小学校五年 浦崎 直生

父方のばあちゃんから戦の話聞いた
小学五年生の夏
ばあちゃんは対馬丸に乗るはずだった
ばあちゃんは何だかいやな気がして
乗らなかった
いとこや近所の友達に乗ってしまった
みんな急に消えた
どうして？
申しわけない気持ち
ばあちゃんが乗っていたら
ぼくのお父さんはいなかった
ぼくもいなかった
みんな消えていたかもしれない

母方の亡くなったばあちゃんの戦の話聞いた
五人兄弟だった
上二人の兄は特攻隊
ばあちゃんは千人針に願いをこめた
願いは届かず海に消えた どうして？
ばあちゃんは残りの家族で南部に逃げた
家族は散り散りばらばらになった
ばあちゃんには水も食べ物もない
茶色の泥水を飲み
ひもじいひもじい思いをした
人が消えているのをみても気にならなかった
ばあちゃん自身が 生きていたのか
消えているのかさえわからなかった
それでも生きた
残された二人の兄弟も消えずに
生きて会うことができた

母方の亡くなったじいちゃんの戦話をきいた
じいちゃんは久米島の人だ
久米島から見た地上戦は
島からでも見える程だった
沖繩本島は真っ赤にもえていた
島の人々は

「ああーもうすぐ自分達も消えるんだな」
とだれもが思った
どうせ消えるなら最後のばんさんはごちそう
を食べよう

大切な家畜を消してしまった
敵は近くにいた
日本軍の兵士
島民をスパイと言って
消した どうして？
島民は何も言えなかった
じいちゃんは生き残った

それぞれなじいちゃんとはあちゃんは
出会って結婚した
そしてぼくのお父さんとお母さんが生まれた
お父さんとお母さんが
出会って結婚した
ぼくが生まれた
あの時 だれか一人でも消えていたら
ぼくはいなかった
命のバトンは 今つながっている

ぼくは小学五年生
今は平和な時代
青は海の色
緑はブロッコリーの山の色
黄色は朝焼けの光の色
赤は夕焼けの色
オレンジは太陽の色
これが平和の色

ばあちゃんが小学五年生
昔は戦の時代
青は軍艦の色にかわり
黄色はおばあちゃんの飲んだ泥水の色にかわり
赤は嘆きの色にかわり
オレンジは悲しみの炎の色にかわった
これが戦の色

母方のばあちゃんが生きていた時
あの戦から時は流れ 兄の名前が残る礎の前
に初めて 車イスでおとずれた
「ごめんね ごめんね 来れなくて兄さん」
ばあちゃんは泣きくずれた
深い深い海の色の涙が
かなしい程
あふれて流れていった
ぼくの母は思った
家族が体験したことを
消してはいけない

ぼくの母はじいちゃんとはあちゃんの戦の話
を聞いた
ぼくはその戦の話を母から聞いた
ぼくはこの戦の話を自分の子供に聞かせよう
命のバトンを引きつぐために